

目次

超能力ちやうのうりよく — 星新一ほしんいち 005

予知の悲しみ — 小松左京こまつさきやう 011

影かげ — 都筑道夫つづきみちお 035

赤ん暴君あかぼうくん — 平井和正ひらいかずまさ 055

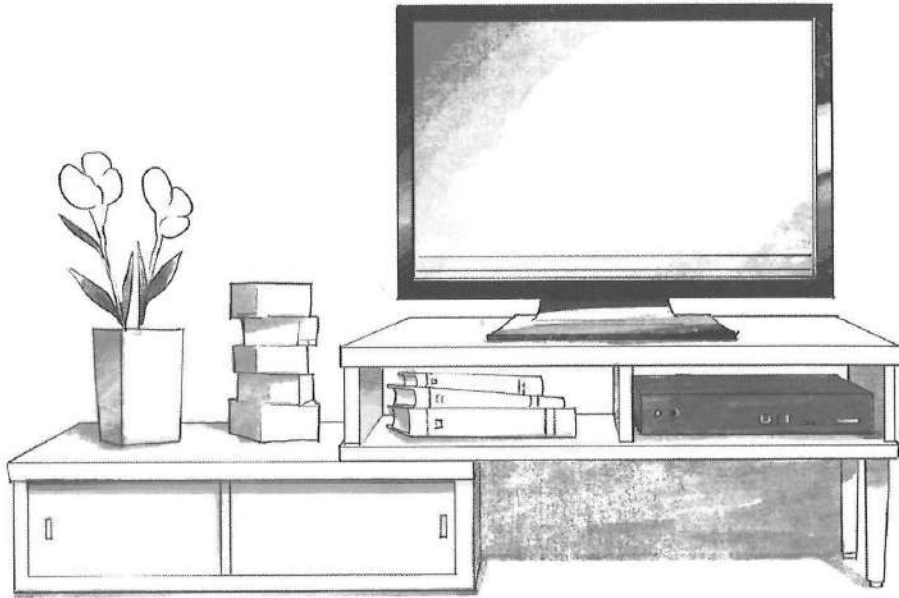
闇やみにつげる声 — 筒井康隆つういやすたか 115

超能力

ちやうどのうりよく

星新一

ほししんいち



テレビ局のニュースのアナウンサー。ある日、いつものように原稿を読もうとする
と、意志に反して口が勝手にしゃべりだした。

「ニュースを申しあげます。贈収賄事件が発覚しました。K産業が、その監督官庁
の高級官僚に、定期的に金品をおくっていたというもので……」

放送後、局内は大さわぎとなった。だれかが当人に聞く。

「なぜ、あんな原稿にないことを話した」

「自分にもわからない。しぜんに声が出てしまったのだ。頭がおかしくなったのかな」
「頭がおかしくなかったじゃ、すまないぜ。抗議があるだろうし、でまかせを放送したと
あつては、わが局の信用まるつぶれだ」

みな青くなり、アナウンサーは免職を覚悟していたが、ふしぎなことに、いつころ

に抗議の電話はかかってこなかった。

そればかりではなかった。ニュースで指摘された高級官僚が、責任をとって辞職し
たという情報が入った。また、半信半疑ながらニュースを聞いた警察がK産業を捜査
したところ、すぐに贈賄の証拠が発見でき、ただちに関係者を逮捕したという。

テレビ局内の空気は一変した。大変なスクープをやったことになる。アナウンサー
への批難は、賞賛の声と変わった。

「驚いたね。きみのしゃべったのは事実だった。なぜ、あれがわかった」

「それが、自分でもよくわからないのだ。その文句が頭にひらめき、それが言葉となっ
て出ていっただけなのだから」

「もしかしたら、超能力かもしれないな。表面化しないでいる不法行為、それを発見
する力をさずけられたのだ。これからは、その才能を大いに活用してもらいたいな。

わが局の視聴率は、ぐんとはねあがる」

「さあ、うまくいくかどうか」